

主の降誕 夜半のミサ

2012.12.24

ルカ 2・1-14

今晚私たちは大変な寒さの中、クリスマスのミサのためにここに集って来ました。ここに集うために私たちが身を晒した寒さが、ここで私たちが祝っているクリスマスを一層引き立てているようにも思えます。何故かと言うと、私たちが身をもって感じるこの寒さが、クリスマスの祝いの中心に向かって一層私たちの心を引き付けるからです。クリスマスの祝いの中心には、この祭壇の前に置かれた幼子イエスのご像が象徴する、インマヌエルとなって私たちの世界にそのお姿を示してくださった神の愛の暖かさが息づいています。クリスマスが告げているこの神の愛の暖かさに魅かれて、その暖かさを求めて私たちはここに集っているのです。クリスマスの祝いの中心には、私たちが自分たちの手で作り出すのではない暖かさがあります。クリスマスの夜、私たちの世界にその愛のぬくもりをもたらすために生まれ出てくださいました神の愛の暖かさに身も心も凍りつくようなこの現実の中に生きる私たちが包みこまれることこそがクリスマスの祝いを祝うということです。クリスマスがもたらす、私たちの手で作られるのではないこの神の愛の暖かさに真実包み込まれるとき、私たちは、私たちよりもはるかに過酷な状況の中でクリスマスを迎えた人々とともにこのクリスマス祝うことが出来るのです。

いつの間にか、私たちの心の中に定着しているかもしれないクリスマスの暖かなムードは、私たちが外の世界を忘れて、自分たちだけでその中にヌクヌクとしているとするなら、クリスマスによって神が私たちに伝えようとしたことを台なしにしてしまうかもしれません。クリスマスはその初めから、この世界の最も過酷な状況の中で、その暖かな光を輝かせ続けてきたのです。身を寄せる宿もなく、寒空のもと、やむなくベツレヘムの馬屋に人の世の生を受けた神のいのちが、クリスマスの私たちへのメッセージの中心です。それぞれの時代の過酷な状況の中に生きた人々の心を、クリスマスはこの中心に向かって、すなわち、秣桶に眠る乳飲み子の姿において示された神のいのちへと招き続けて来たのです。クリスマスはその初めから、この世界の現実の歴史を生きる人々とともにあったのです。そのようにして、私たちが生きるこの現実の世界に、神の愛そのもののいのちが私たちとともに息づいていることを示し続けて来たのです。

聖書が語る最初のクリスマスがそうであったように、ベツレヘムの馬屋に生まれ出た嬰兒が指し示す、この私たちの現実の中に息づいている神のいのちの

神秘は、今もこの世界に生きる多くの人々には知られないままです。何故なら、この世界の現実の中に生きる私たちは、私たちに押し迫ってくるその圧倒的な力の前にその現実からの出口を求めて、そのことだけに狂奔しているからです。しかし、今晚ここに集った私たちはそのような現実を生きる今の私たちの中にも、あの最初のクリスマス以来、神のいのちが息づき続けていることにあらためて心の目を向けるように招かれてここに集っているのです。

ここからは昨年のクリスマスの説教の中で述べたことをあえてそのまま繰り返させていただきます。

クリスマスは、この私たちの現実の世界の歴史の中に、神のいのちが生まれ出たことを祝う祭りです。このクリスマスをそれを伝えて来たキリスト教の信仰の立場に立って祝う私たちは、この世界の現実を生きる自分たちの中に流れる人間としてのいのちが、クリスマスにおいて示された神のいのちに結ばれていることを意識しなければなりません。クリスマスの夜、ベツレヘムの馬屋に生まれ出た神のいのちは、私たちが生きる現実の世界のいのちと同じいのちを共有することによって、そのいのちがどこから来たものであるかを私たちに示そうとしているのです。このクリスマスの神秘を信仰をもって受け止めることが出来る時、私たちは、自分たちが生きるいのちが、クリスマスの嬰兒が示しているように、神から来たものであることを受け入れることが出来るのです。そしてこれこそが、2011年のこの現実の中で迎えたクリスマスが私たちにもたらす、最も貴重な恵みのメッセージ・福音であるのです。

2011年3月11以降のこの現実の中で、私たちはクリスマスを祝うことにひけ目を感じることはないのです。2011年の私たちが生きた現実が心ある人々に気付かせたことと同じことを、クリスマスはその初めから、私たちの現実の世界の歴史の中で示し続けてきたのです。クリスマスは、私たちが現実を生きることにのみこだわって、隅に追いやってしまってきた、そしてその結果、いつの間にか忘れてしまっていた、私たち一人ひとりが生きるいのちの尊さを私たちに思い起こさせるためにあるのです。私たち一人ひとりが生きるいのちは、この現実の世界の中では、はかないものです。それゆえに、涙がこぼれるほどに、抱きしめたくなるほどに、いとおいしいものです。他の誰にとってよりも、私たち全ての者のいのちの源である神にとってそうなのです。私たちのうちに流れるいのちのいとおいさを抱きしめるために、神はあのクリスマスの夜、ベツレヘムの馬屋に人となって、私たちが生きる現実の世界に来てくださったのです。神はそうにして、放っては置けない私たちに対してあらたな絆を結んでくださったのです。

2011年の現実を生きた私たちは、「いのちの絆」というキャッチフレーズに心

を向けて来ました。けれども、その 2011 年が過ぎ去ろうとしている今、私たちは、私たちの心を惹いたこのキャッチフレーズが、私たちの心から遠ざかってゆくことを恐れなければなりません。この現実の世界を生きる私たちは、常に新しいキャッチフレーズを必要としているからです。そのようにして、私たちの心のうちに常に思い巡らし続けなければならない、これほどの人々の犠牲の上に私たちが得たはずの貴重な経験をも、忘却という蔵の内にしまいこんでしまうことを警戒しなければならないのです。

そのためにこそ、私たちはこの 2011 年の年の暮れにあたってクリスマスのミサをささげているのです。クリスマスこそが、私たちにとって、神がその身をもって示してくださった「いのちの絆」の原点だからです。神は、私たちの現実の世界に、「いのちの絆」のかけがえのなさを回復し、それを決定的に示すために、人となってベツレヘムの馬屋のお生まれになったのです。そのお方をかたどる幼子イエスのご像が安置された祭壇の前に頭を垂れて、私たちの心に去来する全ての想いがそのお方に結ばれて、私たちの祈りとなるよう願いを込めて、このクリスマスのミサをともにおささげしたいと思います。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高